

レファレンス

コーナー

最近の朝鮮半島に関する図書

野田美代子

ここ数年來韓国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、朝鮮半島に関する出版物は増加の一途をたどっている。その要因は昨年二〇〇二年の日韓共催サッカー・ワールドカップと日韓国民交流年によって日韓・日朝の国際交流に改めて焦点があたり、さらには北朝鮮の核開発疑惑や、日本人拉致問題のクローズアップに触発されていることも大きい。

日韓国民交流年に向けて全国の各自治体や経済、政治、文化など多くの関連団体がさまざまな日韓交流事業、共同事業、文化行事を推進した。学术界も歴史、政治、経済、北朝鮮などの分野ごとに共同研究を発足させた。それらは一九九八年の日韓共

同宣言の歴史認識を出発点としている。

いち早く共同研究に着手した歴史学の分野では双方の歴史教科書の検討と批判、共存の歴史教科書作りの提言、教科書制度の研究があり、共同研究批判、新しい歴史教科書の提起など議論が起こり、『日韓歴史共同研究プロジェクトシンポジウム報告書——世界国家時代の歴史研究と信頼される歴史副読本をめざして』（日韓歴史共同研究プロジェクトチーム事務局 一九九九年）を例として歴史教科書関連図書の刊行が相次いだ。その他、日韓共同研究の成果には日韓共同研究叢書として、野副伸一・朴英哲編『東アジア経済協力の現状と可能性』（慶応義塾大学出版会 二〇〇一年）、宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識Ⅰ』（同）、小此木政夫・文正仁編『市場・国家・国際体制』（同）などがあり、また戦後の補償問題全般にわたる共同研究の成果には、池明観ほか編著『日韓の相互理解と戦後補償』（日本評論社 二〇〇二年）があげられる。

北朝鮮に関する図書の刊行は一九九〇年代に入り次第に増加しはじめた。当研究所図書館編『発展途上国日本語文献目録二〇〇〇年版』は、北朝鮮地域に図書二冊、『同二〇〇一年版』で三五冊を採録している。二〇〇二年中の刊行点数は、国立情報学研究所の日本語データベースによると、九月の日朝首脳会談と日朝

平壤宣言を受けて、五〇冊を超え前年の二倍の量にふくれあがった。さらに二〇〇三年では二月末ですでに二〇冊に達する勢いである。

これら市販の北朝鮮関連図書の圧倒的多数は、国家社会を攻撃・揶揄し、扇情的な題名が付されている。

和田春樹・高崎宗司編著『北朝鮮本をどう読むか』（明石書店 二〇〇三年）は、日本のテレビ、週刊誌、月刊誌などのマスメディアが張った北朝鮮ネガティブキャンペーンをその発端から解明し、北朝鮮関連図書の洪水現象をその背景、書き手、出版社などから分析している。

同書はまた、韓国における北朝鮮関連図書をめぐる状況や日本との差異を紹介している。韓国では南北首脳会談が行われた二〇〇〇年以後、北朝鮮関連図書の刊行点数が急増し毎年五〇冊を超えている。しかしその姿勢は「冷静に北朝鮮を見つめ、関係を少しでも改善させ、よい方向に進めるといふ願いから出発しており」、これは「日本の状況と天地の差がある」と北朝鮮本が濫造される日本の状況を怒りをもって批判している。「拉致問題だけが偏重され、一方では植民地支配に対する謝罪と経済協力問題、他方では核とミサイルの安全保障問題が全く議論されず」として「平壤宣言と健全な世論を背景にして拉致、補償、経済協力、安全保障問題など」を解決していかねばならないと結んでいる。

二〇〇二年は特に歴史事典や総合

ガイドブック類が例年になく数多く刊行された。それは金容権編著『早わかり韓国を知る事典——暮らしから歴史まで厳選五〇〇キーワード』（東海教育研究所）、秋月望・丹羽泉編著『韓国百科第二版』（大修館書店）、和田春樹・石坂浩一編『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』（岩波書店）、曹喜淑著『現代韓国を知るキーワード七七』（大修館書店）、三橋広夫著『これならわかる韓国・朝鮮の歴史Q&A』（大月書店）、韓国史事典編纂会・金容権編著『朝鮮韓国近現代史事典 1860—2000』（日本評論社）などさまざまである。特に古田博司・小倉紀藏編『韓国学のすべて』（新書館）は同地域をまず問題として捉え、事件や運動などを贖罪と連帯の地平から語る従来の解説ものとは異なっている、と編者（古田）が『月刊しにか』（二〇〇二年一月号）で自薦している。環太平洋問題研究所編『韓国・北朝鮮総覧二〇〇二（VOL.4）』（原書房）は、一九九三年（VOL.3）以来九年ぶりの刊行で「朝鮮問題とプッシュ政権」等の特集している。またエス・ビー・ビー編『全真相』朝鮮民主主義人民共和国（第四版）（政治経済研究会）は総六七二ページの巻頭に「朝鮮民主主義人民共和国の素顔」と題して豊富なカラー写真を組み、「特集ビジネスチャンス」の項目をたてている。

（のだ みよこ）図書館図書整備課